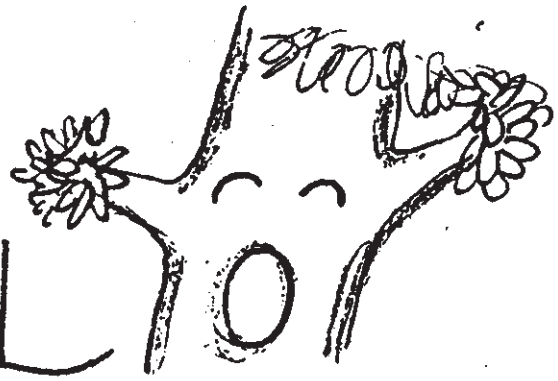




第37号



ECOMAIL

関西 ECOMAIL

関西支部会員のみなさまに、ワークショップのお知らせや環境教育に関わる情報の交換をしていただくために発行しています。

また、学会員以外の方々に、環境教育に関心をもっておられる方や実践をされている方とのコミュニケーションを広く図りたいと思っています。

日本環境教育学会会員のみなさまには支部会費、会員でない方には購読費として、年間1500円をいただきましたら、ワークショップの案内とこの関西 ECOMAILを送らせていただきます。

(通信費振り込み先: 日本環境教育学会 関西支部 郵便振替口座

00990-5-37886)

第57回 ワークショップのお知らせ

"Teaching Kids to Love the Earth" ワークショップ

日時: 1997年3月16日(日) 午後1時より午後4時

場所: 京都YMCA (地下鉄丸太町下車)

詳細は2・3面をご覧ください。

第37号 目次

- ・"Teaching Kids to Love the Earth" ワークショップ
& ユースホステルから環境教育への提案 ... 2~3
- ・連載企画<阪神・淡路発! 被災地は今>
地域に暮らす、地域とつながるー西宮セイフティ
& エコガイド事業の取り組みからー
(川島憲志) ... 4~5
- ・ボランティア報告
重油回収作業に一日参加しました (奥村裕之) ... 6~7
- ・ネットワーク ... 8

ボランティア募集

日本環境教育学会選挙管理委員会より役員選挙の開票作業のボランティア募集がありました。

内容は下記のようになっていますので、よろしくお願ひします。

事務局(鈴木研)までご一報
ください

日時: 1997年3月20日 13:00~

場所: 大阪府青少年活動財団
3F 研修室

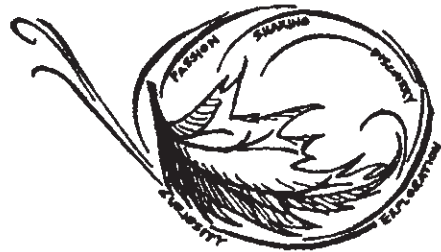
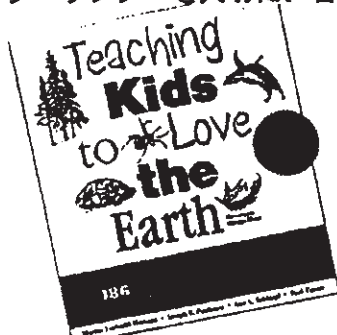
大阪市中央区森ノ宮中央2-13-66

☎06-942-5148

” Teaching Kids to Love the Earth ” ワークショップ

& ユースホステルから環境教育への提案

センス・オブ・ワンダーを大切に、若者や家族が地域で出来る地球のための環境教育



(財)京都ユースホステル協会では3年前より環境教育事業部を創り、様々な活動を行って来ました。今回、国際交流基金日米センターより助成を受けることになり、ユースホステルにおける環境問題への取り組みを進めていくことになりました。その一環として、アメリカ・ユースホステル協会スタッフとウィスコンシン州立大学よりJoseph Passineau氏をお招きし、ユースホステルだけではなく、宿泊施設を使った環境教育の取り組みについて考える機会となればと下記の催しを実施することになりました。春休みというお忙しい時期と重なりましたが、ぜひご参加いただきたくご案内申し上げます。なお、この事業は国際交流基金日米センターより助成をいただいています。

【環境教育学会・関西支部3月ワークショップ】

□日 程：1997年3月16日(日)午後1時より午後4時

□場 所：京都YWCA

京都市上京区室町通水上ル TEL: 075-431-0351

*地下鉄…丸太町下車、北へ徒歩5分

□参加費：500円 (資料代・保険料を含む)

□参加者：環境教育に関心を持つ指導者、教師、学生、親。

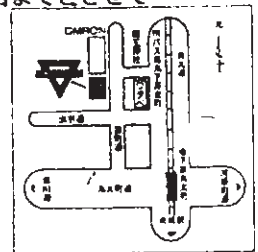
□定 員：なし(当日受付)。人数が多くなった場合、実習の参加者を先着30名までとさせていただきます。その他の方は見学となります。

□問い合わせ：(財)京都ユースホステル協会

TEL 075-462-9185 FAX 075-462-2289

□主 催：(財)京都ユースホステル協会・環境教育事業部

□共 催：日本環境教育学会・関西支部



【東京学芸大学】

□日 程：1997年3月22日(日)午後1時より午後4時

□場 所：東京学芸大学(会場は、お申し込みいただいた後にご案内いたします。)京都YWCA

□参加費：1,000円 (資料代・保険料を含む)

□参加者：環境教育に関心を持つ教師などの指導者。

□定 員：30名(定員になり次第締め切らせていただきます。)

□問い合わせ・申込み：日本環境教育フォーラム事業部(黒岩 筑付)

〒107 東京都港区北青山2-11-10 ダイヤモンドマンションMB1F

TEL: 03-3475-7738 FAX: 03-3475-7739

(財)京都ユースホステル協会・環境教育事業部でも結構です)

□主 催：Teaching Kids to Love the Earthワークショップ実行委員会

【内 容】

環境教育学会・関西支部ワークショップと東京学芸大学ワークショップの内容はほぼ同じです。

□ アメリカのユースホステルにおける環境教育プログラムについて (講師) アメリカ・ユースホステル協会職員

アメリカ・ユースホステル協会では、従来からあるユースホステルの施設を「サスティナブルリビングセンター」という名称に変え、環境への負荷を少なくするエコロジカルな施設の運営とそこに宿泊し、生活を通して新しいライフスタイルを身につけようといった試みを行っています。また、施設を使った環境教育プログラムも積極的に行われており、地域の小学校や青少年団体にとって、宿泊施設付きの環境学習センターとして使われています。具体的な内容について紹介していただき、ユースホステルだけではなく、多くの類似施設の参考になればと考えています。

□ Teaching Kids to Love the Earth・ワークショップ

センス・オブ・ワンダーを大切に、若者や家族が地域で出来る地球のための環境教育
(講師) Mr. Joseph Passineau (ウィスコンシン州立大学教授)

ウィスコンシン州立大学スティーブンスポイント校ナチュラリソース学科教授で環境教育の理論や実践についての講義を持っておられ、また、セントラル・ウィスコンシン環境ステーションというキャンプ場の所長をされています。環境教育には25年にわたって取り組んでこられ、1988年から現在の職に就かれています。1991年には“Teaching Kids to Love the Earth”というタイトルの本を3人の方と出版され、育児の分野に関するベンジャミン・フランクリン賞の子育て部門で最優秀賞を受賞。また、アメリカ中西部地域出版協会における環境教育部門でも最優秀賞を受賞され、1992年にはブラジルで行われた「環境と開発」における国連サミットで各国代表に配布されるためにポルトガル語に翻訳され出版しています。日本では今秋、(財)京都ユースホステル協会・環境教育事業部より翻訳出版を予定しています。その本には、レイチェル・カーソン氏が言う「センス・オブ・ワンダー」を育むための理論と教育法を「具体的なお話し」「アクティビティー」「伝えたいこと」の3つにわけて書かれています。ワークショップでは、『ワクワクした好奇心(Curiosity)を目覚めさせ』『自発的に探検(Exploration)に出かけ』『自然の中の神秘さや不思議さを発見(Discovery)し』『わき起こってきた感動をわかちあう(Sharing)ことで』『情熱(Passion)を持って地球を大切にする』といったセンス・オブ・ワンダーサークルを通して話が進みます。Joseph Passineau氏が“Teaching Kids to Love the Earth”の中で伝えたかったことを余すところなく学ぶ機会となるでしょう。



【問い合わせ先】

2つのワークショップの問い合わせは、下記までお願いいたします。

(財)京都ユースホステル協会・環境教育事業部

〒616 京都市右京区太秦中山町29

TEL 075-462-9185 FAX 075-462-2289

地域に暮らす、地域とつながる

－西宮セイフティ&エコガイド事業の取り組みから－

川島憲志（神戸市在住）

阪神大震災から二年を迎えました。その経験をどう生かすかが社会的にも大きな課題です。環境教育の分野でも震災直後から防災、まちづくり、ボランティア等をキーワードにその辺りの議論が行われているようです。西宮市の環境啓発係ではこうした試みのひとつとして現在、「セイフティ&エコガイド事業」を進めています。

1. セーフティー&エコ事業とは

市民一人ひとりが、阪神大震災での体験を教訓にし、また、地球化時代の責務でもある「自然との共生」という課題を踏まえ、安全で安心できるよりよい環境づくりに向けて、暮らしや町のあり方を再点検・再認識するため、市民が主体となって生活配慮指針づくりを行うための事業である。

我々にとって、自然災害は避けられないものであり、その被害をいかに最小限でくい止めるかが課題となるという認識のもとにこの事業を進める。

また、自然との共生という課題についても、これ以上の自然摂理に反した人間の行動は自然破壊に留まらず、人間自身の生活基盤をも破壊する重大事であるという認識を持っている。生命を生み、育む自然の仕組みも、災害を生み出す自然現象も同じ自然現象であり、両側面をトータルに捉えることのできる環境認識が必要となる。

2. セーフティー&エコ事業の展開

第1段階「セイフティー&エコガイドづくり」活動手引書の作成

- ・活動手引き作成委員会の設置、検討
- ・活動手引書の作成

第2段階「セイフティー&ガイドづくり」モデル指針の作成

- ・臨海部、平地部、丘陵部の3地区でモデル指針づくり
- ・モデル指針づくりを支援するボランティアトレーナーの養成

第3段階「セイフティー&エコガイドづくり」の推進

- ・指針づくりの活動を推進するコミュニティトレーナーの養成
- ・各地域での生活配慮指針づくりの推進

以上はこの事業の説明資料の一部ですが、その第一段階の取り組みとして今年度は、地域の団体や関係者からなる「西宮セイフティ&エコガイド作成委員会」を組織し、環境計画、環境学習の専門家をアドバイザーとして地域の環境について、地理的条件や歴史、文化、町のしくみ等様々な分野で市民が自主的にセイフティー（防災）とエコ（環境）の視点からチェック、現状分析を行うためのガイドブックづくりを進めています。こうした事

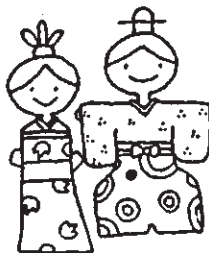
業を始めるきっかけの一つは、立命館大学大学院文学研究科地理学教室助教授の高橋学さんの論文「土地の履歴と阪神・淡路大震災」やお話しを通じて、震災の被害状況が土地の履歴、過去の災害状況や土地開発のありようと大きく関係しているという事実に触れたからです。例えば、もともと海、潟湖、河川であった低湿でしかも軟弱な地盤によって構成され、宅地としても不向きであり、農地としても生産性の低い地域が1960年代～70年代の都市化の進行と米の生産調整があいまって比較的安価な住宅地として造成され、そこに経済優先で低湿な土地にはふさわしくない建築材、構造、工法を用いた文化住宅や狭小住宅が建てられたという経緯があるそうですが、今回こうした地域や建物が大きな被害を受け、多くの死者を出したということです。

このことから、造成以前はその地域で当たり前を受けつがれていた土地条件に関する情報や、その地域との上手なつきあい方が無視されたり、受けつがれていないことがうかがえます。また環境問題の大きな原因のひとつともいわれる「地域の土地とそこに暮らす人々の関係の喪失」が自然災害の問題とも深く関係しているということが見えてきます。被災した多くの人達から「自然を守る守ると言いながら、守られていたのは自分たちやったんや…」と人間が自然に対していかに傲慢であったかという意味の言葉を耳にしましたが、自然との共生や共存の意味を改めて考えさせられます。

この事業の特徴は、こうした事実を背景に、環境問題も自然災害の問題もその原因のひとつが地域の土地とそこに暮らす人々との関係の喪失にあり、もう一度その関係性を取り戻すことが重要であるという考えに立っている点ではないかと思えます。そして、そのためには地域に暮らす人々が自分の住む地域の自然、それに根差した生活や文化、社会のしくみを理解し、自分が身体的にも精神的にもその地域とひとつながりであり、その地域こそが自分の命としての存在や暮らしを支えているという感覚を取り戻すことをめざしている点です。まさに、奈良産業大学の井上有一さんが紹介されている「生命地域教育」と通じるところがある興味深い取り組みです。

こうした感覚の醸成は、このところ盛んになってきたボランティアな市民の参加によるまちづくりの場面でも、地域に暮らし、地域を知っており、自らが地域のまちづくりの担い手であり、地域をつくり、その利害も共有するという市民意識を育てていく上でも欠かせません。

この取り組みが今後どういった成果をあげ、広がりを持っていくか興味のあるところです。また、つながりで成り立っている地域のありようを相互に学び育てていくことの可能性と必要性を改めて感じます。エコロジカルな暮らしやまちづくり、ボランティア等さまざまな文脈でそのための参加の場をどうデザインしていくか、どうもこれからの大切な試みのように思えます。



新聞で福井県三国町の海岸への重油回収ボランティアの募集の記事を見かけた。二年前西宮で発足した日本災害救援ボランティアネットワークが、無料でバスを三国町まで走らせてくれるという。早速連絡を取ると、集合場所・時間・必要なもの（長靴・上下の合羽・マスク・手袋（軍手とゴム）など）を告げられ参加することになった。

阪神大震災の直後に初めてボランティアというものを経験した。それから「ボランティア」に対する感覚は大きく変わった。以前は「善いことかもしれないが、わざわざ自分がしようとは思わない。」といった感じであったが、その経験を通して「ボランティア」が色々な人と社会的立場や年齢・性別・住みかを超えて出会ったり、被災の現実に直面して悩み、ほんとに苦しむ人たちの力になっているのか問い直したりして、自分が人間として生きているという実感を持てる機会であることを強く感じた。それ以来、事故や災害のニュースを耳にするたび、そこに行つてなにか自分ができることはないかと考えるようになった。無料バスの記事を見て、重油漂着の現場を見たいという野次馬根性も多少ありでは行ってみようということになった。

当日は新大阪の駅に朝七時に集合し、そこからバスに乗り北陸自動車道を通じて敦賀町へ向かった。三国町は海が荒れていて作業ができないので場所が変更されたのである。十時半ごろ現場に到着し、バスの横で作業着に着替えた。ジャージをまず着て、上から帽子、マスク、上下の合羽、手には軍手とゴム手袋、足に長靴、首に手ぬぐいを巻き「いざ鎌倉」である。昨日できたばかりという地元とボランティア団体合同の窓口で受付と保険加入を済ませ、勝手な行動は危険なので避けることなどの注意を受けた後、そこから歩いて十分ほどの作業現場へ向かった。受付で感じたのは炊き出しのおにぎりやうどん、飲料がたくさんあったことで、参加者は好きなだけそれらを口にすることができたことである。二年前は早朝暗い中、慣れない手つきでおにぎりを作ってでかけたのになあと思った。

現場までの道には油の跡がすでについており、道端の水たまりには油膜があちこちに張っていた。現場の方から歩いて来る人々の体にはたっぷり茶色い油がついており、独特の臭いが強烈に鼻をつく。現場に到着し、早速作業に取り掛かる。目の前にはグレーの空と冬の白波高く荒れる日本海が広がっている。そこは約百メートル続く岩場で、重機は入りこめず作業の大半は人力に頼るしかない。岩場には厚さが最大30センチほどの重油が海岸線いっぱい漂着していた。寒さと時間の経過で重油はすでにかかなりかたまっており、行き掛けの道よりも何倍もきつい臭いがしている。

作業の手順としては、まず素手かシャベルで岩場の重油をバケツに集め、それをバケツリレーでドラム缶に集める。更に、せっかくためた重油をドラム缶からドラム缶へバケツ

リレーをして移動させ、岩場ギリギリの所まで入り込んだクレーンのそばまで運ばなければならない。そして、クレーンで蓋をしたドラム缶をトラックに積み込み、ようやく外へ運ぶのである。その後重油をどう処分するかは聞いていないが、それが消えてなくなるわけではなく、別の場所を汚染しつつ処分せざるをえないのだろう。とにかく岩場が狭く、どんなに非効率的でもこの手順で行なうしか仕方ないという感じである。

岩場ではずらっと人が並び作業をしていた。二百人以上はいただろう。集める人・リレーする人（「静脈」の油担当と「動脈」の空バケツ担当）と自然に分担が出来あがっている。人の比較的少ない場所を選び、素手で油の回収を始めた。岩場の隙間の小石の間まで入り込んで。取っても取っても底が見えない。固まった油を素手ですくい取るのは重労働である。ヌメツとした手触りが手袋を通して伝わる。体はすぐに油まみれになる。始めてすぐに気が遠くなった。しんどいし、どれだけ時間がかかることだろう。しかし、夢中で作業を続ける。寒いのに汗をかき始める。不自然な格好で作業をしていたので途中で上の合羽のボタンが外れてしまった。手は油まみれなので自分直すことができず、結局下に着ていたジャージを汚してしまった。二時間ほど続けた後、今度はバケツリレーに加わる。これがまた重労働である。絶え間なく油をぎゅぎゅつめたバケツが集まってきて、休む暇なくバケツを次の人へ渡していく。とても重い。三時半くらいに作業終了の指示がでるまで続けたが終わる頃には全身がだるく、一緒に作業していた地元のおじいちゃん・おばあちゃんには本当に苛酷な労働だろうと思った。

どうしてこうしたことに参加しようと思いついたのか、自分でもわからないところがある。高校・大学を通じて自分なりに環境のことを勉強してきたつもりではあるが、どうして環境に関心を持ったのかというのもわからないところがある。私は、四月から北海道で教員となるが、自分さえもよくわからないのに子どもたちの心を理解することができるのだろうか。まして、環境のことに眼を向けさせることができるのか。でも、この「わからない」ところに人間を相手にするこの仕事の魅力があると思う。

環境教育にいつでも、どこでも通ずる「マニュアル」はおそらく存在しないし、これから出会う子どもたち全てにこうした活動に参加してほしいとも思わない。それよりは、ふとした場面で立ち止まり「どうしてだろう、なぜだろう」と問うことのできるように子どもたちと関わっていくことが大切であり、自分自身も内面への問いを継続していく人間でありたいと思う。この文章を通して伝えたいことは、「こうした活動をする＝善」という単純な図式でないことを最後に理解してほしいと思う。

奥村さんは昨年、大阪教育大学
大学院を修了され、今春より
地元 北海道の小学校の先生
になられることに決まっています。
関西で学ばれたことを北海道でも
生かしてください。私たちとしても
うれしい限りです。



わつとわーく

◆ 南河内水と緑の会

梅は咲いたが桜はまだかいなの持尾へ、
2日間の旅

初日は、炭焼きの煙をひたすら見つめながら窯の声を聞いてみませんか。お昼は熱々の豚汁をたっぷりと。夜は、窯の炎に身を焦がしオーバーナイト。翌日は、早朝バードウォッチング。桜の蕾ふくらむ持尾の春を散策します。

〈日時〉 3月29日(出)～3月30日(日)
(29日雨天時は30日に炭焼のみ順延します。)

〈場所〉 南河内郡河南町持尾

〈参加費〉500円

〈申込問合せ〉平尾 0729-54-5553

◆ 錦織公園ネイチャーイベント 間伐・下草刈りなど里山の手入作業

昨年12月の間伐体験会の時に始めた、「じゅんさい池」東斜面の間伐・下草刈りを続けて行います。ご一緒に手入れをすれば、きっと花咲く山に変わると思います。

〈日時〉 2月16日(日) 10:00～15:00頃
3月16日(日) 10:00～15:00頃
(いずれも小雨決行)

〈場所〉 府宮錦織公園「河内の里」の家
(富田林市・錦織 0721-24-1506
近鉄長野線滝谷不動駅・南海高野線滝谷駅下車徒歩約15分)

〈持物〉 弁当、水筒、あれば剪定バサミ、軍手

関西 ECOMAIL

編集 日本環境教育学会 関西支部 世話人会 広報委員会

発行 日本環境教育学会 関西支部

事務局 大阪教育大学 環境科学教育研究室(鈴木善次研究室)気付

〒582 柏原市旭ヶ丘4丁目698-1 (TEL&FAX 0729-78-3381 [直通])

第38号は 1997年4月28日発行予定 原稿必着期限4月19日

(原稿は下記 植田宛に直接郵便かFAXで送っていただいても結構です。《早く記事になります》)

植田善太郎 (広報委員) 〒592 堺市浜寺石津町東2-3-35 TEL&FAX: 0722-47-2751

〈参加費〉無料、自由参加(どなたでも開催時間内において下さい。)

〈主催〉 錦織公園自然友の会

〈問合せ〉松原安茂 0721-29-5043

〒584 富田林市久野喜台2-10-15

春の宝ものをさがそう

〈日時〉 3月27日(休)9:00～28日(金)15:30

〈場所〉 信太山青少年野外活動センター

〈集合〉 27日 9:00 阿倍野青年センター

〈プログラム〉初日午前:自然観察、午後:野草のクッキング、フィールドビンゴ、夜:冬の星座を見る焼きイモづくり。2日目午前:クイズをしながら自然観察ウォークラリー、午後:発表会。

〈参加費〉4,000円(交通費、宿泊費、教材費、保険料等)

〈申込法〉3月14日(金)までに電話かはがきで氏名、学校名、学年、住所、電話番号、保護者氏名をお知らせください。

〈対象〉 大阪市内の小学4年生～中学3年生

〈定員〉 30名(申込多数時は抽選)

〈講師〉 (社)大阪自然環境保全協会・大阪シニア自然大学研究員

〈申込問合せ〉大阪市立阿倍野青年センター
06-628-9041 〒545 大阪市阿倍野区桃ヶ池町1-13-4

第37号 1997年3月5日発行